

## 西欧批評論述の中の中国図像

—越境する知の表象—

桑 島 由美子

### 要 旨

ポール・ド・マンの『美学イデオロギー』に拠れば、テキストは〈物質的な書き込みによって〉構成された出来事であるとされる。様々なレトリックによって美的・詩的なかたちで粉飾、汚損をほどこされてゆくのが『美学イデオロギー』であり、そこでは「美的なもの」が「政治的なもの」そして現象論的な認識論と深く絡み合う。そして、比喩表現の歪像化的な作用、想像（構想）が心象（イメージ）を自ら越えていくこと、美的なものが排除の原理として機能することなどが指摘されている。<sup>1)</sup>

90年代の東アジアにおける急速な市場化と、華人消費文化は、国家像の変貌とともに、新たなグローバル化文化想像のもとでの「中国図像」の変容をもたらした。海外知識界との接触と越境、欧米の知識生産・論述における「文本中国（Text China）」「文化中国（Cultural China）」「中国性（Chineseness）」の概念、また西欧と中国の「中間性」を特色とする香港の理論研究史を手掛かりに、中国像をめぐる知の表象の諸相を鳥瞰してみたい。主に香港ポストコロニアル研究の第一人者、朱耀偉の著作『当代西方批評論述的中国図像』<sup>2)</sup>と、劉康（デューク大学）の文化批評をテキストとして、90年代の言論、思想状況の焦点化を試みたい。<sup>3)</sup>

キーワード：ポスト97の香港文化 政治と審美の二元対立 「民主」神話と「反神話」  
「中国」論述と知識生産 知識人の自我放逐 西欧の虚構としての中国像

## 序言 香港の理論研究史

香港におけるポストモダン、ポストコロニアル研究の中では朱耀偉を中心に見ていきたいが、特徴的なのは「后東方主義」(ポストオリエンタリズム)の提唱である。朱耀偉の著作に入る前に、香港における理論研究史を概観しておきたい。

詩歌創作や理論批評で著名な香港大学の梁也斯<sup>4)</sup>は、香港文化に関しても少なからぬ文章を書いている。彼は「香港文化の問題は、中国民族文化のモデルへの還元で解決できるものではない。」とし、返還という政治的な現実に対して、西欧化された価値観が、東方の文化と接触する時の摩擦、緊張は顧みられず、香港文化に関する歴史資料も散逸した状況にあり、残された道は「自己否定」だけであると述べている。

近代化理論の研究で知られる香港中文大学の金耀基<sup>5)</sup>は、グローバル化によるモダニティの拡散は、それ自体が啓蒙理性の獲得した成功の証しであるにしても、差異の多元性の中で、対抗的な自我と他者が対峙することはあり得ず、新しい位置づけを得ることを主張している。同じく香港中文大学の沈清僑は、アイデンティティと文化想像、イデオロギーをめぐって、ポストコロニアル香港の文化政治の行方を模索し、テキストを通じた主体と自我の鏡像段階の分析を進める。

香港大学社会学系の周華山<sup>6)</sup>は、香港の「中間的」なアイデンティティが西欧の優越性に対抗するものであるとして、教育と言語の問題を分析し、いわゆるバイリンガル・エリートが、西欧主流学術体制の産物であり、西欧の政治経済、学術の覇権、英語という言語覇権のうちに学術権威としての地位を確立していること、一方でポストコロニアル文化状況における「沈黙的群体」の問題を取り上げている。ポストコロニアルは植民地支配の終わりを意味しない、それは隠蔽され複雑化していくため、内在的な自覚と系統的な理論分析が必要だと説く。世紀末の「迷惘(困惑)心情」を表現する洛楓<sup>7)</sup>の香港文化論や、羅永生の文化覇権の分析、謝品然、鄧招光の神学的アプローチなど、香港のポストコロニアル研究は独自の境地を開拓してきた。

### 1. 朱耀偉における「西欧批評論述の中の中国図像」

先に述べたように朱耀偉はポストオリエンタリズムと植民文化の関係について提議し中国文化論述に新しい空間を開拓しようと試み、「論述」の主体をめぐる議論が焦点化される。「中国文化」は西欧文化の求める塑像に材料を提供する存在に過ぎない。中国自身の声は西欧の論述に準ずるもう一つの「解説」に過ぎず、「中国」が観察の客体であることに変わりはない。二つの世紀を超える西欧文化批評の言説の中に、「中国文化」はいかなる図像、いかなる文

化形象として存在しているのであろうか。「中国」の図像は、ポストモダン文化転型のさ中において、自己の言説空間を見い出せぬまま、「啓蒙」式の植民地運営のロジックのもと「文而化之」の神話が継続して来たのである。

朱耀偉は中国のポストモダニティ研究に新しい啓発をもたらし、拡大する東アジアの文化生産や知識生産、その影響力についての議論の端緒を拓いた。

朱耀偉が海外華人や中国学を論述するうえで、取り上げたのは第六章における張隆溪と周蕾、<sup>8)</sup>第七章における杜維明と李欧梵、<sup>9)</sup>第八章におけるColin MackerrasとStephen Owen、そしてPerry Link<sup>10)</sup>である。

第六章においては中国人が語る中国観とは、西欧がその高度にmeta-lingualな思維方式によって西欧を語ることは実際、稀であり、専ら中国人が西欧の論述モデルを鏡として、その鏡を通しての分析が自己のイメージをより鮮明に投影することになる。ゆえに中国人批評家の描き出す中国イメージと西欧の論述との共謀する状況を明らかにしていかなければならない、として張隆溪の論述を分析している。

張隆溪は、「中国」とは「西欧の虚構」であり、西欧の「ユートピアの源泉」としてのみ存在すると言う。彼は中国の批評家でありながら、その発想は完全にサイド式のイマジナリーな「東方」であり、張隆溪はヴィーコを援用してその「硬直化したイメージ」を確定し、17世紀以来欧州人の興味を引いた中国像を例示しているが、西欧の眼差しの中の中国像が西欧の様々な異なる価値観によって歴史的に塑像されてきたものであることは明らかである。つまり張隆溪の論述は、張隆溪自身の描く「中国像」を他者化する道具となっており、そこには尚「付かず離れず」の美が残存している。大陸出身でアメリカで教育を受けた張隆溪の「差異」のアイデンティティが指摘されようと、その論述と西欧批評の論述は何ら変わるところがないのである。

張隆溪は、20世紀中国の論述は外来理論の受容と抵抗の歴史であることを運命づけられているとして、中国化されたマルクス主義と官製イデオロギーを挙げ、さらに魯迅の「鉄の部屋」（閉ざされた統治）の状況下においても「学術空間」の中に外来理論を取り込み、吸収することは可能であるとしている。張隆溪は中国において西欧の学術的な語彙や理論構築が行われなければ、西欧理論家に分析の「原料」を提供するだけとなり、まさに中国論述の危機であるとする。しかし西欧理論を掌握する者は必然的に「神秘を解く」任務を負うことになる。

一方で香港からアメリカへ、被植民地と植民地の挟間に身を置く周蕾は、張隆溪とは異なるスタンスを「中国と女性のモダニティ」<sup>11)</sup>で表明している。盲目的に「中国性(Chineseness)」を鼓吹することを諫め、ethnic spectatorshipを「主体の凝視と他者の形象の間」に置き換えるが、それは張隆溪から見れば「中国の現実」を認識しないことを意味する。周蕾は中国の

詩人、北島が国際化され、商品化されたことにより、中国古典詩の固有の特色を喪失し、欧米中国学者の尊厳を傷つけたとする幻想の中の「中国イメージ」への固執と自己防衛を北米中国学者Stephen Owenの干渉として断罪するのである。このことは周蕾がTani Barlowの文章“*Theorizing Women : Funu, Guojia, Jiating*”の、婦女、国家、家庭にいずれも翻訳上「中国の」という修飾語を加えたことについて、「中国特殊論」に拠る「中国化」として批判していることを付け加えている。普遍から隔絶するための土着化について、「寄生」的性格を持つ「対策」(tactic)は内からの解体を意味する脱構築と本質的に変わらない。周蕾の描く中国女性は、スピヴァックや鄭明河<sup>12)</sup>の描く第三世界の女性とは大きく異なり、その発言は西欧の主導的な論述とその歴史的な条件を踏まえたものであり、特定の批評家による中国イメージの占有を阻止することで、大きな貢献を果たしている。

張隆溪や陳小媚<sup>13)</sup>の「オキシデンタリズム (西方主義)」は、「中国性」と「中国経験」を核心とする奇妙な中国イメージについて一瞥するものであった。これらのイメージは未だ西欧理論と中国の現実を掌握し得ない未知の声を压制し、自己を固定化する危険がある。

第七章では、杜維明と李欧梵が取り上げられる。中国知識人のマージナルでディアスポラなイメージについて、また杜維明の「文化中国」(Cultural China)の概念、李欧梵の「尋根文学」の問題について詳述する。杜維明は「中国」が政治地理的な概念であり、蛮夷を周縁化し、「中心」としての文化を擁護してきたことと、東アジアの工業発展が「中国性」にいかなる影響を及ぼしたかを問題にする。「文化中国」という第一世界から、周縁である台湾、香港、シンガポールなどに対しては「外向」の動力が働く。第二世界の重心はChinese diasporaである。そして知識/文化/論述を抑圧する中心性の作法が、「文化中国」が外に向かうことの合法性を保証することを否定できないのである。

一方で雑誌“Daedalus”に李欧梵が掲載した論文では、「中心としての周縁」から「中心の解消」へというテーマで、典型的な文学批評のスタイルで「尋根文学」の「反中心的な情緒 (中国大陸の封鎖性を打破するもの)」として、「流放」の問題にも触れている。「下放」は文化大革命中に日常化した「内部放逐」(internal exile)などの「流放」と知識人の「自我放逐」を比較し、20世紀初頭の日本留学や、20年代からの欧米留学、於梨華の「デラシネ世代」に見られるように、故郷喪失経験からの自己の周縁化や文化アイデンティティの問題に説き及んでいる。

李欧梵は「中心と周縁」という二元的弁証法から「中心の解消」の鼓吹と、国際的な文化研究の提唱へと向かう。陳光興は「国際主義式的本土主義」(New Internationalist Localism)を提起しており、それは国家のロジックや地理、地域のロジックを運用するものではないとしているが、文化研究の発展分析に基づいた「本土文化」の強調は、杜維明の文化中国の論点とは相反するものである。朱耀偉は、新批評から、フォルマリズム、構造主義、脱構築

まで、そしてポストコロニアリズムと文化研究の重視は他者の「対抗覇権」を重視したとは言え、進化とは言えず、器が変わっても中身は変わらないのではないだろうか、と結んでいる。

本書の最後ではグローバル化時代の中国イメージについて詳述されるが、ポスト返還（97年）以後の状況を踏まえて、アメリカのアカデミーにおける90年代文化研究特に周蕾の編集による“*Modern Chinese Literature and Cultural Studies in the Age of Theory: Remagining a Field*”が華人社会の複雑な意涵、「中国性」「中国」「香港」に関する解釈を重視したことが、特別な意義を持つものであるとしている。このように中国をめぐる喧噪が喧しい中、ポスト97のグローバリゼーションの下で新しく付与された「中国図像」を探索する上では、90年代の華人消費文化とクリントンの対中国政策がきわめて大きな関わりを持つ。90年代はポスト新時期と呼ばれるように、新しい消費ムードが生んだ流行文化の急速な普及、一方で知識人の社会的地位と影響力の凋落が進み、「ポストモダン化」が中西二元対立を超えて中国大陸を論述する新しい空間となっていた。中国の批評家による「ポストモダン」文化の論述も全面的な視野と理解を備えたものであったが、意外に思われたのは『疆界2』『新文学史』の中国ポストモダニズム文論がジェイムソンの文化商品化、市場化に終始関心が集中する現象であった。中国大陸本土と中国経験のある在米華人批評家が、ポストモダンの論述において「中国」イメージの具現化を凝視したが、この論述体制や知識生産と、アメリカの対中国政策による市場化とは微妙な共謀関係にある。「文化」は「覇権」に順じるにせよ抗するにせよ両刃の剣となる。王逢振<sup>14)</sup>が言うように、20世紀80年代には西欧理論の借用に務めた中国が、90年代には西欧理論に対する批判的な視線を帯びるのも、突きつめればそのような実情による。王寧は中国モダニティを描述する上で、「影響」や「移植」の背後にある合法化について分析し、またサイドの英文テキストの分析問題に集中的に照準を当てている。

## 2. 劉康における近代化の二つの選択

次に在米の批評家であり、フーコー研究とポスト冷戦時代の理論研究において知られる劉康の「グローバル化と中国近代化の二つの選択」<sup>15)</sup>について見て行きたい。

### 2.1 政治と審美の二元対立のロジック

劉康ときわめて近い立場で20世紀文学史の再構築について語り、西欧中国学界について疑義を呈してきた周蕾の議論にも見えるように、中国文学の「モダニティ」と「モダニズム」の問題は文化的侵略と結びついており、「モダニティ」は「新」「旧」両形式の有用性を失わ

せるものとして機能した。「旧」形式は社会への適合性を失い、「新」は外来のお仕着せであったからであり、文化的には記念碑的な地位と多様な受容の様式を生んだ五四文学についての再考が促されるのである。五四期の理論家が要求していたのは、あらゆるカテゴリーからの文学の自立であったが、それは芸術のための芸術という唯美主義には結びつかず、社会変革としての新しい媒体としての文学という理想と結びついた。古い形式は「無からの主観的な産物」とされ、新しい芸術は本質的に出来事の分析と心理の研究という「科学的基礎」に基づく「客観的観察」とであるとされた。

劉康によれば、西欧中国学においては、中国現代文学の強烈な政治意識から、文学作品は社会政治運動のメガホンに過ぎず、イデオロギーの道具であって、それに内在する芸術価値は乏しく、よって文学として鑑賞、研究するに当たらないと認識してきた。社会主義リアリズムや、反映論をめぐる西欧では支配的な観点であるが、社会問題への思い入れは中国文学の基本的特徴の一つでもあり、現代文学の政治社会性をもってその芸術的価値を否定する背後には、政治／審美二元対立のロジックの含みがある。周蕾はその中に「東洋(中国を含む)が単なる現実の政治であってこそ、西欧のみが審美と想像(イメージ)を獲得する」という二重構造を見出すのである。

一方でマルクス主義文化思潮と美学理論の伝統について見ると、審美イデオロギーが70年代以降の中国文化思潮の主流を成してきたことについての認識は、西欧では皆無である。マルクス主義文化思潮と左翼文学運動は中国近現代史上の重要な伝統であり、そこに内在する発展と変遷、内在する矛盾と衝突についての研究が必要とされ、瞿秋白、魯迅から胡風、周揚から王若水、朱光潜から李沢厚、劉再復、豊かにして複雑なマルクス主義文化思想と美学理論の伝統を認識すべきであり、80年代においては影響が最も大きく、官製イデオロギーに対する脅威と挑発が最も鮮明であったのは、李沢厚、劉再復、金觀涛らの思想理論であった。このように80年代には深い内省に基づいて、中国の新マルクス主義文化理論が形成されていたのである。

## 2.2 文学史再考のイデオロギー的背景

まず研究対象としては、左翼文学と革命文学の歴史をどのように認識するかという問題がある。五四新文学は基本的に左翼リアリズムの文学伝統であり、1949年以後の文学はソビエト文学と毛の『講話』の影響を深く受けた革命文学伝統であるが、西欧の学者は政治学、社会学の角度、あるいは「新批評」の形式主義の角度から出発するにせよ、左翼文学と革命文学伝統に対する認識については、悉く偏向と盲点に満ちている。

大陸の学者王曉明、陳思和は中国共産党の官製イデオロギーによる近現代文学史に対して「文学史の再考」の問題を突きつけたが、同様にして西欧中国学者もまた、同様に文学史と

文学批評について反省すべきであり、アンダーソンの著作はその格好の端緒となろう。共産党が政権を掌握する以前に創作された1949年以前の文学は一括りに「党の路線と政策を推進する」宣伝品に帰着できるものではなく、仮に1949年以後の中国文学にしても、李欧梵が指摘しているように、「革命文学」の中国近現代文学における空白は、ある種の「奇妙な記憶喪失」「歴史の忘却」を表現している。このような「忘却」空白および全面否定は、一種の「政治的無意識」の反映、実質的には依然として政治的基準が文学作品を判定する問題である。もし現代文学作品が、基本的に政治学、社会学的文献の価値を持つとしても、そのことが政治学と社会学の研究方法が理にかなっているという理由にはならない。<sup>16)</sup>

### 2.3 政治的センセーショナルリズムと主題先行

劉康は次のように述べている。ここ十数年来、西欧で出版された中国学出版史上、稀に見る数の中国近現代文学の翻訳紹介、および専著を詳細に一読するなら、以下のような疑問が起こって来よう。すなわち多くの専著は、倦むことなく政治社会的背景や作品の政治的含意を討論しているが、一体そのうちの、どの部分が作品の言語・構造・形式の分析を通して得られた洞察なのか？ 多くの翻訳書の選定と範囲が、なぜ政治的にセンセーショナルなもの、そして中国の作家や批評界が文学的価値があまり高くないと認める作品、たとえば『苦恋』や『人よ！人』などに集中するのだろうか？ なぜこれらの文学研究の専著は、作家や作品の勇氣ある「政治的反対意見」、そして政治上、当局と対抗する立場に飽くことなく興味を寄せ続けるのだろうか？ 少なからぬ専著と論文が、文学作品の言語・形式の「テキスト」の詳細な解説に向かわず、そのうえ、「テキスト」の含意する歴史、文化、社会の重層的な意味を解釈するに際しては、往々に「主題先行」に陥り、限られた、また使い慣わされた自明の思惟やディスコースから出発して、左翼的、マルクス主義的な文学と批評はすべて党の路線と政策に服従するものであるから、芸術的に見ても粗雑劣悪で、芸術作品として看做すに値しないと、一方的に決めつけるばかりなのである。<sup>17)</sup>

### 2.4 文化ヘゲモニーと欧化コンプレックス

グローバル化過程でもっとも重要な特徴の一つは、文化生産と商品生産の関係が日増しに緊密になっていることである。大衆文化と日常生活、イデオロギーと学術思潮などの各領域において、文化と商品は緊密に結びつき、徐々に内部的な衝突と矛盾に満ちた「グローバル化文化想像」を形成する。グローバル化文化想像は当然のことながら中国に関わる様々な光景を包摂する。90年代の中国文化想像はある一点で特に重要であり、それは「近代化」が全てを圧倒する中心テーマになったことである。

いま近代化の二つの選択の問題を提起する理論上の意義は、グローバル化文化想像の様々

な「歴史の終焉」と資本主義現代化の一元決定論に焦点をあわせていることで、実践的な意味は言うまでもない。すでに述べたように、中国現代化の二つの選択の一つの核心問題は、「革命」と「建国」の関係である。この問題は単純に本土／外国，東方／西方，伝統／現代，専制／民主の二元対立で解釈，包含できるものではない。「革命」は中国現代史近百年の伝統を形成し，複雑にして影響深遠な文化覇権（あるいは指導権）と言説系統を持つ。この伝統を考えると，この伝統とコンテクストを切り離すことはできない。かつ，今日の中国におけるこの伝統はまだ歴史の範疇に入っていない。依然として文化ヘゲモニーを有し，私たちの日常生活や学術思考に影響を及ぼしている。

ここで言う「文化ヘゲモニー」は主導的地位を占める社会イデオロギーであり，上層から下層，下層から上層まで広範に動員，発動，宣伝活動を通して，社会の異なる階層，とくに被統治，被指導階層の支持，賛同と参与を獲得する。この見方は主にグラムシ（Antonio Gramsci）から来ている。文化覇権の特徴はまぎれもなく中国革命の重要な特徴である。中華人民共和国建国後も堅持されたイデオロギー化と軍事化の「宝刀」は，文革がイデオロギーによる統治のきわみに至った結果である。文革後の近二十年来，中国共産党の文化覇権はその広範な群集基盤と合法性を次第に喪失した。80年代の文化省察は，すなわちこの文化覇権に対する批判と省察であった。

もし中国近代化に対する異なる選択の思考が，主に歴史，経済，政治と社会の角度から出発すると言うなら，文化批評の直面するもう一つのテーマは，グローバル化の挑戦である。文化領域では，グローバル化の問題は主に「グローバル化文化想像」にある。前に述べたように，ここには商品化の「市場万能」イデオロギーの問題もあり，中国本土が作り出した中国の民族伝統に関する「中国文化想像」もある。90年代の文化批評は当然この両者に対する批判を含んでおり，このような批判自身は当代知識分子の陥った苦境（ジレンマ）を反映している。甘陽は80年代末，「複雑に錯綜した」状況のもと，「両面作戦」を取るしかなかった。伝統批判（旧伝統と五四以来の新伝統を含む）もあれば（資本主義）モダニティ批判もある。しかし，80年代の文化批判は終には革命伝統と覇権に対する政治的糾弾となった。そしてこのような糾弾は欧化コンプレックスと複雑に纏れてくる。<sup>18)</sup>

## 2.5 西欧マオイズムの系譜

劉康はアルチュセール，フーコーなど，毛沢東の理論系譜学の関係を提唱したのは，一つには歴史（とりわけ60年代の歴史）に対する強調であり，中国文革中の世界性の視点の強調であり，二つには，中国と世界が当時近代化の二つの選択の様々な理論と実践について再び深く検討を加えることであるとしている。その見方に対する様々な批評に対しては近代化，グローバル文化討論と文化想像の大きな背景の中に置いて見なければならない。その構

想は理論と実践の試行錯誤の中で、一元決定論と多元決定論の輻輳し矛盾する、複雑な連動関係について理解を深めることにあった。しかし批判者の中には、中国の歴史的悲劇の糾弾を理由に「新マルクス主義」に対しても、近代化の二つの選択についても徹底的に否定する者もいた。この種の二元対立的な批判論理は、最初の構想と相容れないものである。それに加えて、多くの知識人たちは大量の扇情的文章に共鳴してアメリカなど西欧の「多元・自由」社会への衷心からの賛美を引き起こし、正鵠を得た討論と批評をなおさら困難にした。「フーコーを以て毛沢東を正当化する」と言う批判に至っては、更に牽強付会と言うべきである。毛に関わる様々な神話が打破されたあと、毛批判、反毛をもって資本主義の「民主」神話を証明し、あるいはかつて毛の保健医師を務めた李志綏のようなアメリカのベストセラー市場の趣味に合わせて描かれた毛の「反神話」がひとつの流行となるのも無理からぬところである。当然毛沢東の神話、とりわけ毛のイデオロギー一元決定論と毛が文革中に行った文化恐怖主義を深く批判し、省察しなければならない。しかし現在は厳粛に学術的検討を行っている最中であり、市場の趣味に左右され、毛沢東神話という極めて複雑な問題を批判、清算するにあたり卑俗に流れてはならない。<sup>19)</sup>

後学論争における劉康の主要なテキストについて、主な論点を、ほぼ原文どおり、あるいは一部を要約して内容を紹介した。ここで特に劉康を取り上げたのは、メディア、グローバリズム、近代化という今日まで一貫した視点と、現代文化変容を表象や美学イデオロギーから照射した議論だからである。中国の「後学」が体制文化への批判に向かわず、また流行の市場万能イデオロギーによる中国の解説を拒んだことは、即ち「新左派」「新保守主義」であるとして海外論壇からの批判を招くこととなった。劉康は、中国の問題を討論する中、しばしば中国特殊論を強調する傾向があると述べているが、張頤武は「中国の特殊な政治境遇をめぐる大規模な文化生産はすでにグローバル文化資本運営の不可欠の資源となっている。」「グローバル化文化権力の創造した「中国」に関わる「知識」が問題である。」として、海外学術界やメディアにおける、その象徴資本の生産と伝播を注視するに至る。この自覚は「中国モダニティ」への歴史的省察を生み、中国では伝統的に社会科学のハードコアの上に展開されてきた近代化論争の瓦解を招きかねない「非歴史的」西欧理論、ポストモダンへの強い留保的態度となって現れると同時に、一方では西欧学術界の自己批判としてのポストモダンを対抗言説として取り込み、理論的に探究していく方策が取られたのである。

後学論争こそは、90年代文化批評の越境現象を象徴するものであり、欧米学術界の華人研究者も含めた多くの論客が、批評理論のタームを援用して、議論は白熱し、錯綜した。ここでは論争の調停役とされる張隆溪の幾つかの論点だけを紹介しておきたい。

張隆溪は、①ジェイムソンの民族諷諭の概念を批判するとともに、オーウェンの北島と中国の言語に対する公正を欠く評論（文化差異の強調）に反駁している。②フーコーにせよ、

西欧理論の巨匠の権威に盲従することはあり得ず、また政治と審美の関係をめぐる毛の観念は、事実上フーコーが西欧自由派人道主義を批判する際に奨励されたものである。③近代化の実現は、近代中国が自強の道を進むことであるともいえ、五四以来の科学技術から、さらには社会制度への改革でもある。④国内でもポストモダンの意義と「価値」について懐疑が生まれている。と述べている。<sup>20)</sup>

後学論争の遠景とも言える、海外華人の学術と批評論述における中国像について概観するとともに、両義的に機能する批評理論と、いまなおグローバル化文化想像の渦中にある近代化論争に、今後も焦点を当ててゆきたい。

### 結びにかえて——オリエンタリズムと表征の政治

張旭東は、「オリエンタリズムと表征の政治」<sup>21)</sup>の中で、民族、表征、主体性を相対化する新国際主義言説 (neo-internationalism) への批判を込めて、「ポストオリエンタリズム」文化言説が生産される領域を二つの特殊な類型に分け、一つは第三世界主体性の「散種」(dissemination) であるポストコロニアル言説、もう一つは西欧都市の左派知識人が唱える、民族主義と国家に対する批判、例えばベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』(1983年) に対する彼らの共鳴を挙げる。

これら二つの類型による探索は、国際文化理論をより精妙なものにしているが、政治的立場と、知識的立場の不一致から、研究対象と修辞策略に抵触を生じ、奇異な叙述形式によって却って強化された世界史の幻想が、モダニティの修辞に偽装された西欧資本主義へと浸透していくと述べる。アンダーソンやバーバの文章には、民族の主体を解体させ、西欧都市知識人の社会、文化、政治使命を尊重することと引き換えに、ポストコロニアルな主体の内部危機を予告しようとする衝動が見られる。このような認識のもとで言説、知識体系、覇権としてのオリエンタリズムを、再度にわたり検証するなら、ポストオリエンタリズムとは、グローバル化の時代における「オリエンタリズム」の継続を意味し、知識生産と論述、メディアの描き出す「中国図像」は、「他者」の時代の「自我」叙述、すなわち「自我の他者化」に他ならない。90年代の学術研究と文化批評における、中国をめぐる知の表象の諸相は、張旭東の指摘にあるように、そのジレンマを深く内包しているのではないだろうか。

### 注

1) ポール・ド・マン著 上野成利訳『美学イデオロギー』平凡社 2005年クリストファー・ノリス著

## 西欧批評論述の中の中国図像

時実早苗訳『ポール・ド・マン—脱構築と美学イデオロギー批判—』法政大学出版局 2004年  
批評理論の中でも、北米の「イェール学派」とその脱構築批評は、中国の学术界に大きな影響を与えたとされる。

- 2) 朱耀偉著『当代西方批評論述の中国図像』2006年6月中国人民大学出版社の中で朱耀偉は「90年代の「中国図像」を見る上では、クリントンの対中国政策による市場化と、在米華人批評家のポストモダン論述による中国イメージの具現化、その論述体制や知識生産が微妙な共謀関係にある。」ことを指摘している。

他に朱耀偉著『后東方主義』1994年 駱駝出版社があり、中西文化接触と世紀末の中国文化をめぐる論述空間と、文化アイデンティティの問題を分析している。王岳川『后現代后植民主義在中国』によれば、朱耀偉は近年の香港におけるポストモダン、ポストコロニアル研究における第一人者。

- 3) 劉康のテキストとしては、主に以下の3編を取り上げる。「中国現代文学研究在西方的転型」（『二十一世紀』総19期 香港中文大学中国文化研究所 1993年10月）「批評理論与中国当代文化思潮」（『二十一世紀』総22期 香港中文大学中国文化研究所）「全球化与中国現代化的不同選択」（『二十一世紀』総37期 香港中文大学中国文化研究所）（いずれも汪暉編『90年代後学論争』香港中文大学出版社 所収）

他に劉康の近著としては『文化・媒体・全球化』南京大学出版社 2006年

- 4) 梁也斯 香港大学比較文学系 主要著作に、『香港的流行文化』『書的城市』『香港文化空間与文学』などがある。
- 5) 金耀基 香港中文大学社会学客員教授 『香港之發展經驗』（共著）『中国人的三個政治』『中国現代化与知識分子』などがある。
- 6) 周華山 香港大学社会学系准教授 主要な著作に『消費文化：映像・文字・音楽』『解構香港電影』『異性恋覇権』『同志神学』などがある。
- 7) 洛楓 留米博士 主著に『世紀末城市——香港的流行文化』香港牛津大学出版社 羅永生は香港岭南学院准教授 謝品然は香港建道神学院准教授 鄧招光は香港信義宗神学院准教授
- 8) 張隆溪は、アメリカ カリフォルニア州立大学比較文学系教授 主著に『二十世紀西方文論述評』北京 三聯書店 周蕾も同比較文学系教授 陳光興は台湾の歴史經驗を踏まえ、「文化想像」の問題を焦点化している。
- 9) 杜維明 ハーバード大学東アジア系中国歴史、哲学教授 研究テーマは儒学の第三期發展、文化中国、文明対話と現代精神の反思など多岐にわたる。  
李欧梵はハーバード大学東アジア研究所系教授
- 10) いずれも中国語表記は、宇文所安、馬克林、林培瑞
- 11) 拙稿『周蕾研究初探—中国近現代文学と文化研究—』東アジア地域研究第9号 2002年を参照。  
周蕾『中国と女性のモダニティ』“*Women and Chinese Modernity: The Politics of Reading between West and East*”
- 12) ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァックは、1942年カルカッタ生まれ。コロンビア大学教授。  
鄭明河（トリン・T・ミンハ）は、1952年ヴェトナム出身で、カリフォルニア大学バークレー校の女性学教授。
- 13) 陳小媚 Xiaomei Chen “*Occidentalism: A Theory of Counter-Discourse in Post-Mao China*,” Oxford University Press, 1995

- 14) 王逢振 中国社会科学院外文研究所研究員 主著に『意識と批評』桂林, 漓江出版社 1988『今日西方文学批評理論』桂林, 漓江出版社 1988  
『20世紀西方文論研究』(共著)北京 社会科学出版社 1997年などがある。『全球化文化認同和民族主義』(王寧編『全球化与后殖民批評』所収)の中で, 文化ナショナリズムと抵抗の美学について分析している。近著に『交鋒—21名著名批評家訪談録』世紀出版集團 2007年がある。
- 15) 註の3) を参照のこと。
- 16) 「中国現代文学研究在西方的典型」(『二十一世紀』総第19期 1993年10月)
- 17) 同上
- 18) 「全球化与中国現代化的不同選択」(『二十一世紀』総第37期 1996年10月)
- 19) 同上
- 20) 張隆溪「再論政治, 理論与中国文学研究—答劉康」『二十一世紀』総第20期1992年12月「多元社会中的文化批評」『二十一世紀』総第33期 1996年2月を参照のこと。
- 21) 張旭東「東方主義和表征的政治」『批評的踪跡—文化理論与文化批評—』生活・読書・新知 三聯書店p 135

## 参考文献

- Rey Chow “*Ethics after Idealism: Theory-Culture-Ethnicity-Reading*” Indiana U. P  
Rey Chow “*Modern Chinese Literary and Cultural Studies in the Age of Theory*” Duke U. P  
Rey Chow “*Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies*” Indiana U. P  
Zhang Longxi, “Western Theory and Chinese Reality,” *Critical Inquiry* 19 (Autumn 1992)  
Zhang Longxi, “The Mith of the Other: China in the Eyes of the West,” *Critical Inquiry* 5 (Autumn 1988)  
Tu Wei-ming, “Cultural China: The Periphery as the Center,” *Daedalus* 120 (Spring 1991)  
Leo Ou-fan Lee, “On the Margins of the Chinese Discourse: Some Personal Thoughts on the Cultural Meaning of the Periphery,” *Daedalus* 120 (Spring 1991)  
Leo Ou-fan Lee, “Chinese Studies and Cultural Studies: Some (Dis-) Connected Thoughts,” *Hong Kong Cultural Studies Bulletin, Issue 1* (Dec 1994)  
Kuang-ksing Chen, “Voices from the Outside: Towards a New Internationalist Localism,” *Cultural Studies* 6 (Oct 1992)  
Chen Xiaomei, “Occidentalism as Counterdiscourse: ‘He Shang’ in Post-Mao China,” *Critical Inquiry* 18 (Summer 1992)  
Liu Kang, *Aesthetics and Marxism: Chinese Marxists and Their Western Contemporaries* (Durham: Duke University Press, 1996)  
Liu Kang, “The Problematics of Mao and Althusser: Alternative Modernity and Cultural Revolution” *Rethinking Marxism, vol. 8, no3* (1996)  
Edited by Arif Dirlik and Xudong Zhang “*Postmodernism & China*” Duke University Press 2000